

改めて社会的責任をキーワードとして



鹿児島大学歯学部小児歯科学講座
助教授 森 主 宜 延

■ 略歴

昭和 46 年 3 月	日本大学歯学部卒業
昭和 50 年 3 月	日本大学歯学研究科(博士課程)小児歯科学修了
昭和 50 年 4 月	東京都杉並区西保健所主事
昭和 51 年 7 月	国立公衆衛生院基礎課程修了
昭和 51 年 11 月	日本大学歯学部助手
昭和 54 年 4 月	鹿児島大学歯学部予防歯科学講座講師
昭和 57 年 4 月	鹿児島大学歯学部小児歯科学講座助教授 現在にいたる。

世紀が変わることが、反省と改革の大きな機会となる。小児歯科医療において、この歴史的に与えられた機会を見逃すことなく、なにをすべきか明確にしておくことは、小児歯科の発展のみならず歯科医療の医療における役割も社会的に認められることは間違いない。なにを反省し改革すべきかを考えて行く先に、小児歯科は果たして社会にどのような貢献をなすべきであるのか？という最も素朴な疑問に突き当たった。今までなにもしていなかった訳ではない。しかし、少なくとも小児歯科の歴史を体験した者にとって、昭和40年当初にみられた、社会的弱者である子供達の口腔の健康・育成に貢献しようといったロマンに満ちあふれ、純粹で幼稚とも思える勢いは薄れているようだ。小児歯科医の増加と社会的認知により、すべての歯車が小児歯科でいかに生き延びるかという現実的な考え方が優先されている気配はないだろうか？すべてが気づかぬうちに社会的から個人的な配慮へとシフトしていないであろうか？学問的には、社会的ならびに臨床的思考から中途半端な基礎的領域へのシフトが生じている気配はないであろうか？溢れるように疑問が湧き出てきた。このような疑問の噴出は、幼児期から成人にいたるidentityを模索する思春期のように、はじけ飛んで無秩序と思えるような発展をしてきた小児歯科が、見失いかけている本来あるべき社会的な目的を改めて明確にする時期にさしかかったと考えられないであろうか？すでにモラトリアムを持ち出す余裕はない。この小児歯科の目的を決定する基本的キーワードが社会性であり、社会的責任であろう。具体的に、咬合誘導についてもその社会的貢献を問われたとき、はたして学問的整合性を社会にむけて説明できるであろうか？予防へのシフトについても、その概念と具体性を問われたとき、社会にむけて学問的に説明できるであろうか？蜘蛛の巣のようなレーダーチャートにおびきだされて納得する社会ではすでにないような気がする。今回のシンポジウムでは、このような、疑問から、大学人としての役割を意識し、社会の要求である学問的整合性への私の挑戦についての具体的なプランと経過を説明するとともに、目標とする小児歯科としての社会的責任の表現について皆様に伝え、聞いていただきたいと考えている。